

<b>Title</b>	新しい物語と儀式をつくる(分科会 1 心理カウンセリング的配慮)
<b>Author(s)</b>	藤掛, 明
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 79-82
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5300">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5300</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 新しい物語と儀式をつくる

藤 掛 明

### 1. 二つの原理

#### (1) 老人ヤコブの心理的再生

創世記四五章を心理臨床家として自由に読むと、そこには大きな苦難にあつた老人ヤコブの心理的再生が見事に描かれていていることに気づかされる。

ある日、老人ヤコブは、かつて死別したと思つていた愛息のヨセフが、生きていることを聞かされるのだつた。しかし彼はその話が信じられず、ぼんやりしていた。彼が真実な状況を理解し、喪失の哀しみから立ち直るためには、二つのことが必要であつた。一つは、「新しい物語」であり、もう一つは、「儀式」である。

ヤコブは、死んだはずのヨセフがたどつた、その後の数奇な展開（摂理の物語）を残らず聞かされた。ヤコブの描いていたものとはまったく異なる物語に接して、彼は自分のこれまで思い込みを書き換える作業に直面した。

そして、ヨセフが贈ってくれた車を見せられた。その車の豪華さは、理屈抜きに、ヨセフがエジプトで権力の座にあることを証するものであった。そして、「これに乗つて一刻も早くエジプトに会いに来てくれ」というヨセフの思いをリアルに感じることでできる象徴でもあり、ヤコブをエジプトに向かわせる決意を迫るものでもあった。

この二つのことがそろつて、彼は元気づき、実際にエジプトに向かうのだった。

## (2) 必要な二つの原理

私たちも、人生の展開点で、ペースを変えたり、元気づこうとすることがあるが、うまくいかないことがままある。たとえば、自分の過去を振り返るばかりだと、それなりの発見はあつても、振り返る作業が際限なく続いて終わつてしまふ。振り返りが「ふんぎり」や「決断」に至らず、生活自体は変わらない。そこには「儀式」が欠けているのである。

一方で、生活のメリハリをつけようと、「自分へのご褒美」「記念日」など非日常的なイベントを多用することができる。しかし、そうしたイベントだけでは、瞬間的なお祭り騒ぎで終わつてしまふ。そこには、「新しい物語」が欠けているのである。

新しい物語と儀式。この二つがそろつて、私たちは元気づき、実際の新しい生活に向かつていくことができる。ひるがえつて、大震災の対応にあたつても、このことは大切なポイントになつていふと思う。

## 2. 心理的な配慮

### (1) 新しい物語

被災者に関わる時、彼らが「新しい物語」をつくることができるよう配慮することは大切なことである。人生の危機の体験は、人に人生を振り返らせ、危機の意味を考えさせる。真剣に自分の体験したことを吟味し、解釈すると、そこに点と点を結ぶ流れのようなものが見えてくる。いわば自分の人生の「物語」を意識させられるのである。

ここでいう「物語」とは、架空の話という意味ではない。自分の人生や自分をとりまく世界を、自分なりの言葉によつて解釈することをさす。そこには模範解答はなく、各人が吟味し、言葉にして構築していくものである。

自分の物語をつくるためには、沈黙思考するばかりでは駄目で、神に語り、人に語ることが必要となる。人は語りながら、語り合いながら、自分の思いを感じ、新しい着想を得、新しい原動力を得ていくからである。その上で、援助者としていくつかの留意点があげられる。①物語をつくることを焦らせない。②物語をつくるにあたって既成の模範解答で縛らない。③いったんつくった物語を硬直化させず、刻々と書き換えてよいと応じる。④相反する複数の物語がある場合には、性急にどちらかを切り捨てず、どちらも尊重し、むしろそれらが統合されていくのを待つ。⑤被災を中心とした物語が人生全体の物語になっていくのを期待する。⑥個人の物語だけでなく、家族の物語、地域社会の物語、国家の物語なども受け止める、等である。

## (2) 儀式

被災者に関わる時、彼らが「儀式」を手に入れられるよう配慮することは大切なことである。人の心身には、生活の区切りや節目が必要である。新しい出発には、広い意味での宗教性のある儀式が求められる。儀式は単に形式でなく、魂の深い体験につながっていく。そこには、援助者としていくつかの留意点がある。①日常を守る儀式を大切にす。②気晴らしの類の儀式も大切にする。③既存の儀式だけでなく、新しい儀式を創出する、等である。なお、援助者自身にも、被災者と深く関われば関わるほど、自分自身の内に新しい物語と儀式をつくることが求められ、避けては通れないものとなる。

儀式をつくることは、個人の課題だけにとどまらない。個人や家族、地域社会、国家の節目をつくるべく、キリスト教界もまた教界ならではのアイデアを出し合いたい。そして新しい出発に向けて、教会や信仰者が、さらなる知恵を祈り求めていくことの必要を思うのである。

### 参考文献

- ・ 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター編『被災者と支援者のための心のケア』聖学院大学出版会、二〇一一年
- ・ 斎藤友紀雄、賀来周一、藤掛明『災害とこころのケア』キリスト新聞社、二〇一二年
- ・ 藤掛明「グリーン・カウンセリングとアート」、『臨床描画研究』二五巻、二〇一三二頁、日本描画テスト・描画療法学会、二〇一〇年